

リーズ

(ラジオ放送用として。)

太宰治

青空文庫

杉野君は、洋画家である。いや、洋画家と言っても、それを職業としているのでは無く、ただいい画をかきたいと毎日、苦心しているばかりの青年である。おそらくは未だ、一枚の画も、売れた事は無かうし、また、展覧会にさえ、いちども入選した事はないようである。それでも杉野君は、のんきである。そんな事は、ちつとも気にしていないのである。ただ、ひたすらに、いい画をかきたいと、そればかり日夜、考えているのである。母ひとり、子ひとりの家庭である。いま住んでいる武蔵野町の家は、三年まえ、杉野君の設計に^よ拠つて建てられたものである。もったいないほど立派なアトリエも、ついている。五年まえに父に死なれてからは、母は何事に於ても、杉野君の言うとおりにしている様子である。杉野君の故郷は北海道、札幌市で、かなりの土地も持っているようであるが、母は三年前、杉野君の指図^{さしず}に従い、その土地の管理は、すべて支配人に委せて、住み馴れた家をも売却し、東京へ出て来て、芸術家の母としての生活を、はじめたわけである。杉野君は、ことし二十八歳であるが、それでも、傍で見て居られないほど、母に甘え、また、子供らしいわがまを言っている。家の中では、たいへん威張り散らしているが、一步そとへ出ると、まるで意気^{いけじ}地が無い。私が、杉野君と知合いになったのは、いまから五年まえである。そ

のころ杉野君は、東中野のアパートから上野の美術学校に通つていたのであるが、その同じアパートに私も住んでいて、廊下で顔を合わせる時があると、杉野君は、顔をぼっと赤くして、笑とも泣きべそともつかぬへんな表情を浮かべ、必ず小さい咳せきばらいを一つするのである。何とか挨拶を述べているつもりなのかも知れない。ずいぶん気の弱い学生だと思った。だんだん親しくなり、そのうちに父上の危篤きとくの知らせがあつて、彼はその故郷からの電報を手にとって私の部屋へはいるなり、わあんと、叱られた子供のような甘えた泣き声を挙げた。私は、いろいろなぐさめて、すぐに出発させた。そんな事があつてから、私たちは、いよいよ親しくなり、彼が武蔵野町に綺麗な家を建て、お母さんと一緒に住むようになつてからも、私たちは時々、往き来きしているのである。いまは私も、東中野のアパートを引き上げ、この三鷹町のはずれに小さい家を借りて住んでいるのであるから、お互の往き来には便利である。

先日、めずらしく佳い天気だったので、私は、すぐ近くの井の頭公園へ、紅葉を見に出かけ、途中で気が變つて杉野君のアトリエを訪問した。杉野君は、ひどく意気込んで私を迎えた。

「ちようどいいところだった。きようからモデルを使うのです。」

私は驚いた。杉野君は極度の恥ずかしがりやなので、いま迄い子ども、モデルを自分のアトリエに呼び入れた事は無かったのである。人物といえ、お母さんの顔をかいたり、また自画像をかいたりするくらいで、あとは、たいてい風景や、静物ばかりをかいていたのである。上野に一軒、モデルを周旋^{しゅうせん}してくれる家があるようであるが、杉野君はいつも、その家の前まで行つてはむなしく引返して来るらしいのである。なんとも恥ずかしくて、仕様が無いらしいのである。私は玄関に立つたままで、

「君が行つて、たのんで来たのかね。」

「いや、それが、」と杉野君は顔を真赤にして、少し口ごもり、「おふくろに行つて来てもらつたんです。からだの健康そうな人を選んで来て下さいって頼んだのですが、どうもあまりに丈夫すぎて、画にならないかも知れません。ちよつと不安なんです。あの、庭の桜の木の下に白いドレスを着て立つてもらうんです。いいドレスが手にはいったものから、ひとつ、ルノアルのリーズのようなポオズをさせてみたいと思つて居るのです。」

「リーズつてのは、どんな画かね。」

「ほら、真白い長いドレスを着た令嬢が、小さい白い日傘を左手に持つて桜の幹に倚^よりかかつて居る画があつたでしょう？ あれは、令嬢かな？ マダムかな？ あれはね、ルノ

アルの二十七八歳頃の傑作なのですよ。ルノアル自身のエポックを劃したとも言われているんです。僕だって、もう二十八歳ですからね、ひとつ、ルノアルと戦ってみようと思っているんですよ。いまね、モデルが仕度していますから、ああ、出来た、わあ、これあひどい。」

モデルは、アトリエのドアを静かにあけて玄関へ出て来たのである。一目見て私も、これあひどいと思った。どうも、あまりにも健康すぎる。婦人の容貌に就いて、かれこれ言うのは、よくない事だが、ごく大ざっぱな印象だけを言うならば、どうも甚だ言いくいのだが、——お団子^{だんご}が、白い袋をかぶって出て来た形であつた。色、赤黒く、ただまるまると太っている。これでは、とても画にはなるまい。

「少し健康すぎたね。」と私は小声で杉野君に言うと、

「ううむ、」と杉野君も唸^{うな}つて、「さつき和服を着ていた時には、これほどでも、なかったんですがね。これあひどいですよ。泣きたくなっちゃった。とにかく、まあ、庭へ出ましょう。」

私たちは庭の桜の木の下に集つた。桜の葉は、間断無く散っていた。

「ここへ、ちよつと立つてみて下さい。」杉野君は、機嫌が悪い。

「はい。」女のひとは、性質の素直な人らしく、顔を伏せたまま優しい返事をして、長いドレスをつまみ上げ、指定された場所に立った。とたんに杉野君は、目を丸くして、

「おや、君は、はだしですね。僕はドレスと一緒に靴をそろえて置いた筈はずなんだが。」

「あの靴は、少し小さすぎますので。」

「そんな事は無い。君の足が大きすぎるんだよ。なっていないじゃないか。」ほとんど泣き声である。

「いけませんでしょうか。」かえって、モデルのほうが無心に笑っている。

「なっていないなあ。こんなリイズつてあるものか。ゴオギヤンのタヒチの女そっくりだ。」杉野君は、やぶれかぶれで、ひどく口が悪くなった。「光線が大事なんだよ。顔を、もつと挙げてくれ。ちえっ！ そんなにゲタゲタ笑わなくてもいいんだよ。なっていないじゃないか。これじゃ僕は、漫画家になるより他は無い。」

私は、杉野君にも、またモデルのひとつにも、両方に気の毒でその場で、立って見ている事が出来ず、こっそり家うちへ帰ってしまった。

それから十日ほど経って、きのうの朝、私は吉祥寺の郵便局へ用事があって出かけて、その帰りみち、また杉野君の家へ立ち寄った。先日モデルの後日談をも聞いてみたかつ

たのである。玄関の呼鈴を押したら、出て来たのは、あのひとである。先日モデルである。白いエプロンを掛けている。

「あなたは？」私は瞬時、どぎまぎした。

「はあ。」とだけ答えて、それから、くすくす笑い、奥に引つ込んでしまった。

「おや、まあ。」と言ってお母さんが、入れちがいに出来た。「あれは旅行に出かけましたよ。ひどく不機嫌でしたな。やつぱり景色をかいているほうが、いいですよ。なんの事やら、とっても、ぶんぶんして出かけましたよ。」

「それあ、そうでしょう。ちよつと、ひどかったですね。それで、あのひとは？ どうしたのです。まだ、ここにいますね。」

「女中さんがわりにいらしたう事にしました。どうして、なかなかいい子ですよ。おかげで私も大助かりでございます。いま時あんな子は、とても見つかりませんですからねえ。」

「なあんだ。それじゃお母さんは、女中を捜しに上野まで行って来たようなものだ。」

「いいえ、そんな事。」とお母さんは笑いながら打消して、「私だって、あれにいい画をかかせたいし、なるべくなら姿のいいひとを選んで来たいと思って行ったのですが、なんだか、あそこの家で大勢のならんで坐っている中で、あのひとだけ、ひとり目立っていけ

ないのですものね。つい不憫^{ふびん}になって、身の上を聞きましたら、あなた、東京へつい先日
出て来たばかりで、人からモデルはお金になると聞いて、こうしてここに坐っているとい
うんでしよう？ あぶない話ですものねえ。房^{ぼう}州^{しゅう}の漁師の娘ですって。私は、せがれ
の画がしくじっても、この娘さんをしくじらせたくないと思いました。私だって、知って
いますよ。あの娘さんじゃ、画になりません。でも、せがれには、またこの次という事も
あります。画かきだつて何だつて、一生、気永な仕事ですから。」

青空文庫情報

底本：「太宰治全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年10月25日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月刊行

入力：柴田卓治

校正：渥美浩子

2000年4月27日公開

2005年10月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

リーズ

(ラジオ放送用として。)

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 太宰治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>